

特集

コロナ禍で1年延期 56年前の「熱」を 週刊誌で振り返る(前編)

北海道経済に大打撃を与えている新型コロナウイルスは、感染の勢いこそ弱まっているものの、各地で第二波の襲来が懸念されるなど、まだまだ予断を許さない状況だ。今夏、札幌で開催予定だった東京五輪のマラソン・競歩も1年後に延期となったが、中止との判断が下されぬことを願うばかりである。

しばらくは「ステイホーム」の生活を余儀なくされそうなのだが、56年前の東京五輪の雰囲気味わってみたいとの趣旨から、本誌編集部が所蔵する当時の週刊誌(1964年10月分)から五輪関連の話題を集めてみた。前編・後編に分けて紹介する。(フリーライター・内海達志)

招待席割り振りに苦慮

成績の詳細は新聞が担う分野であり、週刊誌の場合は舞台裏のエピソードが中心の誌面構成となっている。ただ、華やかな開幕式については各誌ともグラビアで伝えており、なかでも「サンデー毎日」1964(昭和39)年10月25日号が最もインパクトがあった。



▲「サンデー毎日」10月25日号

〈華麗で勇壮な民族の祭典の開幕だった。堂々の行進をつづける九十四の国、六千をこえる選手団。世界の秋ばれをすべ

世界の秋ばれをすべてさらったような青空——やはりスポーツの祭典は秋がふさわしい。どうせ延期するなら、酷暑の開催は避けるべきとの思いが強くなる。もともと、いまとなつては暑さよりもコロナが敵といえるのだが。その開幕式を前に、招待席をめぐる不毛な「場外戦」を報じているのが、「サンデー毎日」18日号だ。国立競技場の収容人員は約7万2千人。大会組織委が正式に招待する対

象は、天皇・皇后ら皇族、IOC委員、閣僚、メダリストなど825人と決まっていたのだが、開幕が近づくにつれ、〈各省の幹部から組織委事務局に「ウチの大臣は特別席でしような」という問い合わせ〉が寄せられたという。

ある程度は「付度」もせねばならない組織委は苦勞が多かつたに違いない。特に頭を悩ませたのが、池田勇人首相の処遇

ここに世界がある

「世界の秋ばれをすべてさらったような青空——やはりスポーツの祭典は秋がふさわしい。どうせ延期するなら、酷暑の開催は避けるべきとの思いが強くなる。もともと、いまとなつては暑さよりもコロナが敵といえるのだが。」



▲「サンデー毎日」10月25日号



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)